essay

「田舎って、どんなところ？」その3

大切なものは何？

カントリーマーケット 里贈人（リゾート）
粟井　文子

北国の夏は短くて、ひと雨ごとに気温も下がり、肌寒くなってきます。着衣も一枚また一枚と増える中、収穫作業や選果作業なども最盛期を迎え、日一日と日没が早まる中、作物を取り敢えず土・畑から納屋に入れるため、今の時期の農家は必死です。

だって、北海道の秋は夏よりもっと短くて、下手をすると残暑が少し長引いた年など、やっと涼しくなったなと思ったら、雪虫がある日突然飛び回るなんて事も良くありますし（近年）折角、丹精込めて育てて来た作物を雪の下にしたくないし、みぞれ混じりの田畑の中でカッパ（雨衣）を着ながらの作業は、骨身に染みる程寒くて作業効率も落ちてしまうし、作物の品質も落としかねない結果になる事もあるので、兎に角収穫すべきものは、早く収穫をして納屋に入れてしまうまで夜空の星も月に掛かる雲を見るのも、明日の天気が心配で真剣にならざるを得ません。収穫作業を取り敢えず終え、納屋の中で選果作業や出荷作業を出来る様になると毎年ホッとします。だって、納屋の中に作物さえ全て入ってしまえば、いつ雨や雪が降ったとしても、ストーブを焚きながらでも作業は休む事なく進めることが出来ますもの。

夏の農作業の時、あんなに美味しかったスイカやジュースから休憩時のおやつも体温を保つための温かいコーヒーやお茶などに徐々に変化してゆきます。春は土の香りに心

粟井　文子（あわい　ふみこ）さん

埼玉県生まれ。
大宮保育専門学校卒業後、江別の町村農場に実習したのが縁で結婚、就農することになる。
Ｈ７年に農水省が開講したグリーン・ツーリズム専門家講座を受講したのがきっかけで、Ｈ９年６月に自宅の一角に、直売所を兼ねた農業情報公開の店をオープンさせる。
農村社会のことを広く多くの方に知って貰いながら、興味・関心を深めて農業応援団を育てたいという思いから、Ｈ10年には貸農園も始めた。

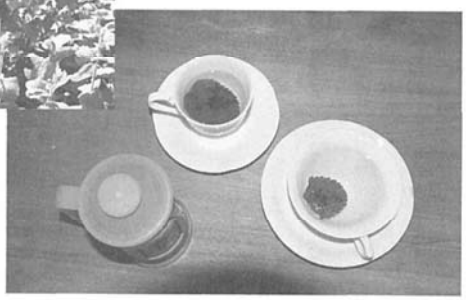
粟井農園　カントリーマーケット　里贈人
江別市西野幌 127 番地 2

が弾み農の魂が目覚め、夏は作物の順調な生育を願い、秋は収穫物を納屋に一つずつ運び入れるたび冬の足音が近付いて来るのを感じ、無事収穫や選別・出荷の作業まで漕ぎ着けると、それまで張り詰めていた肩の力も少しずつ抜けてゆくようです。

近頃は、農作業も労働力軽減や作業効率を考慮し、大面積に作物を作付けする時は機械の力無しでは、手伝いの人も集まりません。重い物を持たずに済んだり、腰を屈めたりしなくても、おしゃべりをしながら作業が出来るので身体は楽になったけれど、そのための機械代に、係る経費はかさむばかりです。

時代の流れと言ってしまえばそれまでですが、そんなに機械化や効率化ばかりを追求しなければ農業は成り立たない世の中になってしまったのでしょうか。ほんの少し、発想の転換をしてみたり、自身で当然と思っていたり夢見ていた生活に対する価値観をもう一度、見直してみるだけで、大面積の作付けや、休み無しの作業が必要かどうか、或いはどれだけの収入があれば生活が成り立つのか、考え方も変わってくることも有るのではないでしょうか。

今の時代、都市住民は田舎に癒しや安らぎを求めて訪れる事を望み、一泊二日や二泊三日ではない長期滞在型の場所を捜す人も増えつつあります。それに対し田舎に生活する多くの人は、都市型の生活を夢見て、便利さや快適さを



求め額に汗して、少しでも自分達の生活を都市生活者のレベルに合わせるため日々の生活を過ごしています。都市計画が自分の住む地域に引っ掛かると、大騒ぎをして開発期成会などという組織まで作り上げて積極的に、自分達の生活の糧であり、先祖の開拓の苦労の末に成り立って来た土地をも何のためらいも無く手離してしまいます。やっと、夢が適うと勘違いをしている農業者の何と多い事か・・・。

「井の中の蛙」とは良く言ったもので、余りにも恵まれた環境の中にどっぷり浸っていると、沢山の宝に囲まれて生活している事すら見えなくなってしまうのでしょう。

農業や農村の生活にしても、都市の生活にしても良い所も有れば悪い所も有って当然なのに、お互いに無い物ねだりや「束の間の夢」に踊らされ、自分達にとって一番大切な物が何なのか、きっと見えなくなってしまっているのでしょうね。海外では、ＮＰＯの団体が調査・報告書等をまとめ、その結果年間何十個というダムが取り壊され、ダムの跡地を元の状態に近いような形で復元されています。その代わりに自然エネルギーの利活用や、生活の中の無駄を省き限り有るエネルギーを大切に考え、節約や環境を守るためのリサイクル等にも力を入れています。

しかし、今の日本はどうでしょう。世界の動きとは逆行するような原子力発電所の増設や、原子力発電で使用され

た、環境を明らかに破壊するような物質を、平然と地域内の小さな声を握り潰しつつ、力ずくでもそれらの物を農山漁村のような所で処理させようとしています。国民の無知や不勉強を良い事にして、尤もらしい理由を並べ立て、地方財政を助けるよと餌で釣る巧妙な手段を駆使して自然破壊を進めているのではないでしょうか。畜産農家で今話題のバイオガスを始め、もっと自然エネルギーと上手に付き合おうと思う人が沢山増えると良いなと思っています。

日本でも、つい先頃ＮＰＯのグリーンファンドの基金が予想を上回る程集まった結果、風力発電用の風車を設置し電力供給を始めたとマスコミで話題になっていましたね。ソーラーパネルを利用した家造りや、農業分野での利用の他、冬の厄介物だった雪や氷を貯蔵して、夏場の冷房や空調に利用する企業やＪＡ等の施設も増え、それを同じ商品を売り込む時の差別化（ブランド）の要因の一つに上手に活用している所も増えている現状です。その他、ホテルやファミリーレストラン等でも、ひと昔前とは違って残飯を家畜に回すだけでなく、リサイクルで肥料化するために業務提携をする所も出始めています。少しは意識が高くなって来たのですね。喜ばしい事がもっと増えると良いですね。

田舎は、落ち葉からお年寄り（先人）の知恵まで有形・無形の財産が沢山眠っています。今、きちんとした形でそれらの価値を伝え残してゆかなければ、いずれ近い将来には正確にそれらを次世代に伝承してゆくことは、困難な自体に陥ることは避けられなくなるでしょう。牧草畑と耕作放棄地（野原）の見分けもつかなかった、以前の自分を振り返ると、他人の批判など出来る立場ではないけれど、私が中学二年の時、母に言われた「知らないという事は恥ずかしい事だ。恥ずかしいという事すら気付かず無邪気（本来は、無教養・不勉強）な振る舞いや言動を言っても何とも思わない」という言葉が、骨身に染みて感じられるようになってきました。

実家で生活していた頃の食生活が押し麦入りのご飯であったり、玄米御飯だったのが、今の毎日の生活より遥かに健康に留意した日々だったのに気付いたのも、店をオープンして間もない頃に顧客の方から頂いた玄米お握りがきっかけでした。祖父は指圧や整体を職業とする人でしたから、食と健康の関連にきっと気付いていたのでしょう。今は、ゆっくり食事を噛んで食べる暇さえない日常が当たり前なんて笑われてしまいそうですが、哀しいかなそれが現実です。

農業は、食・健康・生命・環境・教育など様々な事柄と複雑に絡み合って成り立っている産業です。食べる事を、単なる生命維持や空腹感を満たす手段としてしか考えなければ健康のバランスや機能に変調が現われ、結果的に病院通いの回数が増え、医療費の出費が増える事になります。体内で分解する酵素が極めて少ない食物（季節や産地を無視した物）を食べ続けていると、見た目だけ立派な身体や、アトピー・アレルギーなどの体質を持つ不健全な身体が出来上がる事は、医療の現場でも数多く報告されています。歯並びが悪いだけでなく、適正な本数の歯が生える事が出来ないアゴの変形など、弊害も多数取り上げられてきています。

ファーストフードやスナック菓子・インスタント食品を日常的に「忙しい」という親の都合、又食や健康などに対する無関心のせいで与えないで下さい。本来の正しい食事を受け付けない（美味しいと感じない）子供達の話を聞くと胸が痛みます。新しい生命を誕生させる事が出来るのは女性にだけ与えられた特権なのですもの。もっと大切な命を守るため食や健康にもお互い気を付けて行きましょうよ。学校給食の見直しも、全国的にも広まって、パンや麺が週の半数を占めていたメニューから米飯給食に徐々に変わりつつあるそうですが、道内の事情は全国平均に比較しても まだまだ見直しが急がれる所が多いのが現状のようです。

「男?心と秋の空」のような天気が続く中、それでも今年も着実に仕事や後片付けの作業は進んでいます。つい先日まで、新聞の青果の相場で高値を続けていたジャガイモの値に今年は収益が少しでも良くなるかな?と期待していた

ら、全道各地で作物の出荷が始まったのか、やはり平年並みかな?という相場に戻ってしまいました。同じ物作りでも、他産業とは違って農産物は市場やＪＡと付き合う限り相場に大きく左右されてしまいます。

近頃は自分独自の販売ルートを開拓して消費者と生産者の距離を縮め、農業の応援団に後押しされるグループや個人が少しずつ増えて来ていますが、一般的には系統を利用した生産者の方が、まだまだ大多数を占めていますが、せめて再生産できる位の価格は、自分達で決める努力をしたいものです。不作でも豊作でも農業は、これからの時代生き残れるように一人ひとりが今まで以上に努力を惜しまないように全力を出し切って頑張って行きましょう。そんな世の中が、当たり前になったら農業程面白い職業はないのになあ、と思うのは私だけでしょうか。

農村には、田舎料理や伝統芸能・保存食など地域内で代々引き継がれて来た文化が沢山有ります。しかし、それらの物は日常の延長線上にあるせいか、文化と認識できなかったり、価値あるものと捉えることすら出来ない人が多く、考えさせられる事が多い毎日です。作物を栽培する技術も、技能の一つと考えると、農村には様々な事を教えられる先生候補が沢山居るのだから、生涯学習の中等でそれらの力が存分に活かされたら良いな、と密かに願う今日この頃の私です。